

1605年慶長地震における島津領の津波被害地について

松岡祐也（宮城県公文書館）

§ 1. はじめに

歴史災害に関する研究では、被害地の比定が重要な課題の1つである。先行研究では被害地の比定が誤っている事例もあり、松岡・都司(2012)および松岡ほか(2014)で指摘している。一方で、被害地の比定が難しい事例も存在する。本報告で取り上げる慶長津波の島津領の被害地も、その1つとして挙げられるだろう。

慶長九年十二月十六日(1605.2.3)に発生した慶長津波は、房総半島から九州に至る広範囲に被害をもたらしたとされている。このうち九州での被害地について記述しているのが、慶長九年十二月十九日(1609.2.6)付の島津義久(龍伯)書状である。この書状に記された被害地「東目」「西目」に対して、先行研究では2つの解釈が存在している。しかしいずれの研究も十分な検討がなされたとは言いがたい。

そこで本報告では、島津領の被害地の比定を目的とし、さらに島津義久書状中での津波記述の位置付けについて考えてみたいと思う。

§ 2. 先行研究にみる「東目」「西目」解釈

田山實は『大日本地震史料』に載せた島津義久文書に「東目西目由来記、旧典類聚ニアリ、…」という註を付している。田山は『東目西目由来記』を根拠として、「東目」「西目」が薩摩・大隅に当たるだろうと解釈した。田山の註は以後の研究でも参考にされてきた。これに対して、山本・萩原(1995)は『大日本地名辞書』などを根拠として、「東目」「西目」は東目街道・西目街道のことと解釈、被害は鹿児島湾奥部に限定されるとした。この街道説は松岡・都司(2012)で引用しているが、石橋(2014)は『平凡社百科事典』を根拠として街道説は誤りであり、「東目」「西目」は薩摩・大隅両半島であると解釈した。

田山は史料をもとに考察していたが、以降の研究では地名辞書や百科事典といった研究成果を根拠となっており、十分な考察がなされたとはいえない。また松岡ほか(2014)は史料を用いた考察をおこなっているものの、史料の選択を含めて考察としては不十分であったと評価される。以上から、「東目」「西目」の地名比定のためには、同時代の史料でどのように使用されているのかを検証する必要があると考えられる。

§ 3. 史料にみる「東目」「西目」

島津家関係の同時代史料で「東目」「西目」を探すと、まず『上井覚兼日記』天正十一年九月二日(1583.10.17)条の「西目之舟…」という記述が見つかる。これは、九月四日条に「諸浦より廻船…」とあることから、「西目」に含まれるいくつかの湊を指すと考えられる。ここでの「西目」は街道名というよりも地域呼称である可能性が高い。また、慶長九年四月二日(1604.4.30)付の寺澤広忠(広高)書状には「西目阿久根より御出船之由…」という記述がある。阿久根は西目街道に含まれるが、この記述は『上井覚兼日記』と同様の表記と考えられ、これも地域呼称と解釈するのが妥当だと思われる。

以上は島津領内での「東目」「西目」の用例であるが、当時は島津領以外でも「東目」「西目」という語が用いられていることが分かる。例えば、慶長三年十月三十日(1598.11.28)付の島津義弘他三名連署條書には「東目之衆」という語がある。これは朝鮮出兵(慶長の役)時の慶尚南道東岸・西岸の在陣衆を東目衆・西目衆と呼んだもので、ここでは地域呼称として用いられている。このように、同時代史料では「東目」「西目」を地域呼称として用いられている。

以上のことから、当時は「東目」「西目」を地域呼称として使っており、慶長津波の被害地も広い地域を指すと考えることができる。

§ 4. 慶長津波と島津義久上洛問題

田山は『大日本地震史料』中の島津義久文書について「本書他事ニ渉ル」と註を付けたが、慶長津波についての記述は文書中でまったく別の事象を記したものではない。この文書は当時の政治課題であった島津義久の上洛問題について記述されていることから、津波記述も上洛問題と関係するものとして位置付けることができる。

また慶長津波について記述した島津義久文書には、同日付・同宛所の別の島津義久文書が存在しており、どちらも上洛問題に関係したことが記されている。記述内容には一致する点もあるが、慶長津波については従来知られている文書にしか記述がない。両文書は一連のものとして理解すべきと考えるが、ここからも慶長津波が上洛問題に影響を及ぼしていたと推測することができる。